

氏名・(本籍地) 阿部 旬(東京都)

学位の種類 博士(文学)

学位記の番号 甲第78号

学位授与の日付 平成23年3月15日

学位論文題目 生動性の現象学—フッサールにおける〈ヒュレー〉と初期唯識思想における〈阿陀那識〉との比較考察から—

論文審査委員 主査 司馬 春 英

副査 一 島 正 真

副査 山 口 一 郎

## 阿 部 旬 氏 学位請求論文審査報告書

### 「生動性の現象学—フッサールにおける〈ヒュレー〉と初期唯識思想における〈阿陀那識〉との比較考察から—」

#### 論文の内容の要旨

本論文の目的は、フッサール現象学における「ヒュレー」の概念を、フッサールの初期から晩年に至る諸論考を渉猟しつつ掘り起こすとともに、瑜伽行唯識派の「阿陀那識」に着目し、両者を主として身体性および時間性という観点から比較考察することにある。

そのために、第一部において、『論理学研究』、『イデーオンⅠ』、『内的時間意識の現象学』、『イデーオンⅡ』、『受動的総合の分析』、『危機』書、さらには遺稿中の『C草稿』等を丹念に読み解き、現象学的主題化に対してあくまでも身を隠すような「ヒュレー」に向かって、それぞれの著作がどのような態度で臨んでいるかを詳細に検討する。それとともに、現象学的先行研究において、なぜ「ヒュレー」を主題化することに多大な困難が伴うのかを考察し、意識の根としての自然に迫ろうとする方法論と、そこで立ち現れる事象との相互関係についての考察を深める。フッサールの探究はまず、①形相的・超越的認識を可能ならしめる認識構造へと還元する形相的還元による超越論的現象学であり、さらに、②その形相的認識を可能にしていた認識構造そのものの発生を問う発生的現象学へと移行し、最終的には、③あらゆる認識構造に見られた不断の意味構成の生成を問う生成的現象学へと至るが、論者はそれぞれの段階における「ヒュレー」を巡る論点の深化を追跡する。第一段階では、感覚的ヒュレーと志向的モルフェー、つまり素材と形式との対比の中に位置づけられていたヒュレーが、第二段階に至り、再帰的自覚的反省を通じて、志向性の原領野としての身体、「現在」を可能とする「流れるヒュレー」として解明されるこ

とになる。そして第三段階において、歴史的生成活動の基盤となる無始無終の原初的生としてのヒュレーの流れ、意味構成の歴史を貫流する生命の生動性を見出すに至るとされる。

第二部においては、『解深密経』を中心として瑜伽行派唯識思想における「阿陀那識」の概念を究明する。第一章では、本経成立の歴史的背景と本経の構成ならびに訳経史における思想的展開について、それらの有機的連関を考慮しつつ述べ、本経の仏教思想史における位置付けを明確にする。『解深密経』は、一方で部派仏教の阿毘達磨を継承しつつ、他方で般若教学および華嚴教学に基づいて、識論を大乘の立場で再構築するという、唯識思想確立期に成立したものであり、完成され体系化された唯識教学から見れば、過渡的段階を示している。しかし、それ故にこそ、この経典は体系化された論書には見られない生動性に満ちており、ヒュレー研究に従事する論者にとって最も重要な典拠となるのである。

第二章において、「心意識相品」および「分別瑜伽品」に説かれる「阿陀那識」を主題化し、両品の立場の相違に留意しつつ、そこに共通して説かれる「阿陀那」の語義を闡明にする。前者の識論は、なお三世兩重の因果を基底とする部派仏教的十二支縁起を背景として組織されており、「執持」(ādāna)が十二支の第九支「取」(upādāna)によって説示されるとともに、それが「身」(kāya, lus [蔵])および「体」(ātma bhāva)の発生を縁起的に基礎付ける意味を担っていたことが明らかにされる。ここで一切種子心識の異名として、「阿陀那識」が「身体が取られ、執受される」という義において初

めて立てられる。一方、阿頼耶は、ここでは身体と阿陀那との不可離な結合関係を表すものとされる。論者はここで、「阿陀那識」が導入された根拠として、「それを基盤に現識の活動が可能になっているところの身体を維持することのできる<識>が必要だった」ことを挙げている。次に、後者（分別瑜伽品）における「阿陀那識」を考察するに当たって論者が着目するのは、「不可覚知堅住器識生、謂阿陀那識」という言葉である。この品は止観行の実践を通じて、「唯識」に立つ「事辺際」、さらに無分別智を成就した「所作成弁」の境地に至る道程を示しているが、この「所作成弁」の境地から意識活動が再開される時、最初の世界現出として語られるのが、上述の言葉なのである。これを論者は「感覚機能を持たない基盤であるところの<自然>の認識が生起する。それは阿陀那識である」と受け留め、心が<自然>を基盤にすることができるのも、阿陀那識によって執持されている身体を介してこそ可能なのであり、その意味で「心と<自然>との接触を可能ならしめているのは阿陀那識に他ならない」とするのである。

第三章は『解深密経』における阿陀那識の概念をより明確に捉えるために、『阿毘達磨発智論』、『俱舍論』、そして何よりも『瑜伽師地論』を踏まえつつ、阿陀那識の源流ないし先駆思想を掘り起こす試みであり、第四章は逆に、阿陀那識を巡る議論のその後の展開を『撰大乘論』および『成唯識論』に探る試みである。ここには、初期唯識文献のみに拠っては、意識の深層次元における構成作用と時間性の解明においてなお不明な点が残し、その欠落を補填するためには、唯識思想の大成期から完成期への展開を追跡する必要があるとの論者の認識がある。『撰論』において注目されるのは、熏習、異熟識、末那識の概念の整備、滅尽定における阿陀那識に関する詳論である。『成論』において阿陀那識は「相続執持位」という明確な概念規定を受ける。これは阿頼耶識の「我愛執蔵現行位」、異熟識の「善悪業果位」に対する規定である。重要なのは、我愛や有漏種子の消失した境位においても、「相続執持位」としての阿陀那は残るということである。論者はこの点を「それは自己存在の一期の生に留まらず、…無始爾来の<自然>を貫くように輪廻転生において歴史的に相続される生の流れを維持する識としての阿陀那識なのである」と結論している。

第三部において、これまでの探究を踏まえて、フッサール現象学における「ヒュレー」と唯識思想における「阿陀那識」との比較考察が為される。まず、両者

共に、経験の成立の可能条件を探る超越論的探究の中で見出されてきた事象であることが確認され、次いで、『解深密経』における阿陀那識の現象学的考察が為される。ここで論者は、フッサール初期のヒュレー概念と晩年の『C草稿』におけるそれを、「心意識相品」と「分別瑜伽品」の阿陀那識概念にそれぞれ対応させるとともに、『撰大乘論』の主題を、『解深密経』が飛び越えてしまった『イデーニⅡ』から『受動的総合的分析』における考察に比定し得るとする。その上で、フッサール現象学では「相続」という時間の普遍性を語ることはできない点が指摘される。一期の生を超えた時間は今を生きる現象学的われからは記述し得ず、ヒュレーの持続性はアプリアリな原事実としか言えないからである。阿陀那とは、まさにこのヒュレーのアプリアリな流れの持続を可能としている生命の生動性の維持力である。「事辺際」が現象学の臨界であるとするならば、ここで問われているのは、超越論的な問いを「所作成弁」にまで深める可能性である。ヒュレーと阿陀那との比較研究の意義は、この可能性に向けた通路を開くことにある。

#### 審査結果の要旨

近年、現象学と唯識思想に関する比較研究が注目されてきたとはいえ、「ヒュレー」と「阿陀那識」の関係に特化した研究は従来見られなかった視点を提供するものであり、この点に本論文の独自の意義がある。

フッサール初期から最晩年の草稿に至る諸文献を渉猟し、各段階において現象学的主題化からは身を隠すようなヒュレーがどのように位置付けられていたのかを丹念に辿り直し、現象学的反省にとっての原事実として、ヒュレーの流れを析出していく試みは、フッサールの思索の深まりを跡付ける上でも貴重な業績となり得るものである。

唯識文献に関しては、主として漢訳文献にのみ依拠しているとはいえ、主要先行研究を網羅しつつ、源流時代から独立時代・大成時代を経て完成時代に至る唯識思想の展開の中で、阿陀那識の語義が「相続執持位」として明確化される経緯を丹念に跡付け、阿陀那を根本識とする『解深密経』の思想史的意義を闡明している。特に、『解深密経』「心意識相品」における身体の執持と「分別瑜伽品」における「不可覚知堅住器識」との相違に着目し、前者が後に染汚を基調とする阿頼耶識に展開するに対し、後者が「所作成弁」の境位においても持続する「歴史的に相続される生の流れを維持する識」であるとともに、「心と<自然>との接触

を可能ならしめている識」でもある、との見解を提示している点が注目される。

フッサールのヒュレーと唯識思想の阿陀那識との比較考究において注目されるのは、現象学的探究において原事実とされたヒュレーの流れそのものの内に、さらに生命の歴史を見出し、それを「相続」という形で維持する働きとして阿陀那の意義を解明している点である。ここに、阿陀那とは一期の生に留まることなく、無始爾来の縁起する歴史を貫き、それを可能としている生命の生動性の謂であるとの論者の見解が導かれることとなる。以上がヒュレーの時間性からの考察とすれば、ヒュレーのもう一つの側面すなわち世界構成の基盤としての身体性からの考察として、「分別瑜伽品」に立脚して、阿陀那を<自然>との接触を可能とする識とする見解が導かれる。いずれの見解も、阿陀那の意義に基づいて、超越論的探究を、超越論的自我を脱却して深めることはいかにして可能か、という論者の問題意識を明確に反映している。

問題点としては、フッサール現象学には「相続」の概念が欠如していたとする点、現象学における<自然>概念の究明にやや浅薄さが残る点が挙げられよう。前者については、フッサール最晩年の形而上学を視野に入れたより精確な検証が必要であろうし、後者に関しては、この<自然>概念を「分別瑜伽品」の「不可覚知堅住器」に早急に比定することの是非が問われるであろう。この問題点を克服するには、より深く唯識文献に即しつつ、その内在的な論理を探る必要があり、より精細に文献学的な妥当性を検討する余地があろう。

こうした問題点はあれ、本論文は、異なった思想間の有機的連関を探るために要求される、比較思想的考究に必要な諸要件を十分満たしており、哲学的考察の面でも、フッサールにおける超越論的な問いのさらなる深化に向けた可能性を示唆するとともに、そのために仏教思想の持つ意義を明確に浮かび上がらせている点で優れており、その独自の意義は揺るがない。

以上により、本論文を、課程博士論文に十分値するものと判定し、「合格」とする。